



明治45年5月、ドイツハノーバー高等工業学校実験室で

バイオの先駆者、せんくしや 半澤洵は はんざわじゅんせい 白石村出身の納豆博士

仙台藩開拓民の子として誕生

半澤洵は、明治12年(1879)1月9日、白石村31番地に、半澤時中とときやすと加代の長男として誕生した。

半澤時中は、仙台藩片倉小十郎こじやうの家来として、父の時雍ときやす(当時66歳)と共に北海道開拓使貫属となり、明治4年に白石村に入植した。奥羽盛衰見聞誌下編の図面には、右14番地に半澤時雍の名が見える。

父の時中は29歳のとき開拓使工業局営繕課に務め、その後開拓使属官になったため、明治15年12月に南2条東4丁目の官舎に転居した。

洵は明治17年3月に札幌県創成小学校に入学した。そこで白石村生まれの先輩である高橋進、手塚直巳らとの出会いもあった。

明治25年(1892)8月26日、高等科4年を卒業。すぐに札幌農学校の予科を受験して合格した。農学校で予科5年、本科4年の課程を終えて、明治34年7

月に卒業したが、学校では農業生物学科植物病理学を専攻していた。

農学校の恩師、宮部金吾の計らいで北海道農事試験場の農芸科主任になり、応用菌の研究を始めた。幸運にも東京で北里柴三郎のもとで勉強する機会も与えられた。

北大で応用菌学の研究を深める

明治40年(1907)9月、札幌農学校が東北帝国大学農科大学(北大の前身)になったとき助教授に任官した。

明治44年9月には、応用菌研究のためドイツをはじめ欧米13カ国に留学して、農業経営と病原菌の結びつきを学び深めてきた。

大正5年(1916)6月に教授となり、「土壌と肥料の微生物に関する研究」「農業経営と土壌の肥沃度」「札幌村に発生せし玉葱の腐敗」「牛乳の殺菌」などの研究論文を次々と発表した。なかでも半澤洵を有名にしたのは、近代的納豆製造法の確立だった。

この標示板は白石区老人クラブ連合会が製作・設置したものである。



ナットウ菌の純粹培養に成功

仙台藩白石出身を親にもつ洵には、自らの食生活と関連した課題を大切にしました。納豆は東北の代表的な食べ物だが、ワラに含まれるナットウ菌を使い、勘と経験で作られてきた納豆製造法は不安定で衛生面でも問題があるものだった。

この問題に着目した洵は、ナットウ菌の抽出培養に成功し、温度と湿度のバランスによる安定したナットウ菌の純粹培養法を考案したのである。

この科学的で衛生的な半澤式改良納豆製造法を広めるため、業者一人ひとりに丁寧に指導し、北大を定年退職するまで26年間にわたって指導を続けた。



半澤 洵

わが国の納豆製造法は現在この方法で行われているという。

以来、納豆博士と呼ばれ、納豆研究だけが注目されたが、洵の工業微生物の研究は外国では著名であった。

バイオテクノロジーは現代の寵児となっているが、その根幹は発酵技術であり、日本がその最先端をいっているのも洵の功績から出発していると言っても過言ではない。

大学教授時代の博士は、農地に作物病が発生したと聞くと、ただちに現地へ行って解決に努めた。研究室よりも現場を大切にしていた研究者だった。

有島武郎とともに遠友夜学校教授に

明治27年に新渡戸稲造博士が私財で創設した札幌遠友夜学校では、宮部金

吾、有島武郎、野中時雄らとともに無償の教授となって学生を指導した。大正10年には第3代校長に就任した。

遠友夜学校は、戦時中の昭和19年4月、道庁の命令で軍の施設に転用されたために閉校し、洵は最後の校長となってしまった。

社会事業に力を注ぐようになったのは新渡戸稲造の感化といわれる。新渡戸、有島らはキリスト教の信者として奉仕活動を実践したが、洵は入信せず、自分の考えで奉仕活動を続けた。

大正13年から北大に学ぶ学生のなかに宮城県出身者が多くいた。後輩のために老朽化した仙台寮を改築すべきと、幾度も仙台市に足を運んで資金調達に心をくだき、昭和40年にやっと近代的耐火建築の寮を建てた。洵の誠実で意志の強い姿と、宮城県出身者に感謝されているという。

退職後は福祉事業に貢献

昭和16年、北海道大学を定年退職後、各種の社会事業、福祉団体で奉仕活動をしていった。

その役職は、北海道社会事業連盟

理事長、北海道総合開発調査委員会文化厚生専門委員会委員、各種大学の教授、校長など20を超えるが、役職を形式的に勤める人ではなかった。共同募金運動では使用済みの収入印紙は額面の2～5割を戻してくれるというので、東奔西走して膨大な量の書類を借りて歩き、自らていねいにはがして10万円あまりを得たという話もある。

趣味に宝生流謡曲、能書家などがあり、白石の藩士出身を自認していたとも伝えられている。昭和47年に没した。

(中濱康光)



現在の地図に片倉家所蔵の手書き地図(明治25年作成)を重ねたもの



半澤洵の生家は明治4年入植時の右14番で、写真のペイント会社の位置だが、標示板は13番の武田さんの敷地にある